

令和 3 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2020

課題番号：19K13924

研究課題名（和文）脱・人間中心のアプローチの探究：アクターネットワーク理論とその周辺

研究課題名（英文）On Non-Anthropocentric Approach: Actor-Network-Theory and Others

研究代表者

栗原 亘（Kurihara, Wataru）

早稲田大学・文学大学院・その他（招聘研究員）

研究者番号：80801779

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、脱・人間中心のアプローチと呼ばれる諸議論のなかでも、とくにその先駆けであり、かつもっとも言及されることの多いアクターネットワーク理論（ANT）を取り上げて検討した。まず2019年度には、ANTの成立した時代背景からANTが他のサイエンススタディーズとの関係のなかでどのように展開したのかなどを中心に整理・検討し、続く2020年度には、とくにエコロジーの領域におけるANTの意義を明確化した。これらの作業を通して、ANT、ひいては脱・人間中心のアプローチの射程、意義、課題を明示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アクターネットワーク理論をはじめとする脱・人間中心のアプローチは、環境問題やテクノサイエンス・リスクなど、現代社会が直面している主題の中で顕在化する人間と非人間との関係性を正面から捉えることを目指している。いずれの主題も、社会的なインパクトをもち、人文社会科学の諸議論が今後取り組んでいくことがますます期待されるものである。そこにおいて脱・人間中心のアプローチは、人文社会科学が今後果たしうる役割や進むべき方向性の一端を示す可能性をもつ。本研究は、この脱・人間中心のアプローチの射程、意義、そして課題を明確化することによって、学術的にも社会的にも意義をもつものになったと考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, I focused on the Actor-Network-Theory (ANT), which is the forerunner and the most frequently mentioned among the various debates on the non-anthropocentric approach. In FY 2019, I focused on the historical background of ANT and how ANT developed in the field of science studies, and in FY 2020, I clarified the significance of ANT, especially in the field of ecology. Through these processes, I clarified the scope, significance, and challenges of ANT and, by extension, the non-anthropocentric approach.

研究分野：社会学

キーワード：アクターネットワーク理論 脱・人間中心のアプローチ エコロジー サイエンス・スタディーズ 知のポリティクス 専門知 B. ラトゥール H. コリンズ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当時、人文社会科学の多くの分野・領域において、人間同士の関係のみならず各種人工物から動植物を含む多種多様な非人間 (nonhuman) との関係をいかにして捉え、記述するのが重要な争点の1つとなっていた。特に、人間の側の能動性だけを重視し、その他の非人間を受動的な単なる客体としてのみ捉えるのでは不十分であるという認識が広く共有されるようになり、いわゆる脱・人間中心のアプローチ (non-anthropocentric approach) が注目を集めるようになっていた。

ここでいう脱・人間中心のアプローチの特徴は以下の通りである。すなわち、まず人間だけではなく、非人間にもエージェンシー (=行為者性) を認めるべきとすること、また、人間中心の観点 (非人間は人間からの働きかけに対して受動的な位置しか占めないと考えるようなタイプの議論) と、非人間主義的観点 (いわゆる技術ないし環境決定論など) の双方を回避すること、そして、人文社会科学の知見と、自然科学の知見とを単に折衷するような方法もとらないことである。

こうした特徴をもつ脱・人間中心のアプローチは、公害・環境問題やテクノサイエンス・リスクから、動物解放運動や人工知能に至る、現代における多様な主題の中で顕在化する人間と非人間との関係性を正面から捉えることを目指しており、アカデミックな世界にとどまらず、まさに時代の要請に応える意義をもっていると言える。

しかし、当アプローチに該当するさまざまな議論が活発に提起されるようになってきた一方で、問題も生じていた。それは、提起される諸議論の間の相互関係の曖昧化である。もちろんどの議論も、他の立場の名を挙げて言及をおこなってはいる。しかし、それはあくまでも表面的なコメントのレベルに留まっている場合が多い。さらに、自らの立場を際立たせるために、他の立場を単純化して批判することすらみられる。

本研究は、まずこうした状況を踏まえた上で、この脱・人間中心のアプローチと形容される諸々のアプローチの間の相互関係がいかなるものであるのかを問いながら、その射程、意義、課題を明らかにすることを企図した。ただ、すべてのアプローチを漫然と並べて検討するのはあまり生産的ではない。そこで本研究は、上述の問いを追究するにあたって、とくにアクターネットワーク理論 (ANT) と呼ばれる立場に着目することにした。

なぜ ANT を選んだのか。まず、この立場は、まさに脱・人間中心のアプローチの先駆けとも呼べるものであり、当該アプローチについて (肯定的にであれ、否定的にであれ) 論じるほとんどすべての議論において言及されており、軸に据えるのに適切なものと考えたからである。また、研究代表者が、本研究を開始する時点ですでにある程度 ANT に関する研究をおこなっており、関連領域の他の研究者との交流も持っていたことも理由の1つである。

こうして本研究は、ANT のパースペクティブを、その成立から展開の流れを追う中で明確にし、その上で、この ANT のパースペクティブを軸に据え、他のパースペクティブと比較検討をおこなうことで、上述したような脱・人間中心のアプローチの相互関係についての見取り図を描きながら、脱・人間中心のアプローチの射程、意義、課題などを明らかにすることを目指したこととなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、今日さまざまな分野・領域において盛んに提起されるようになってきている脱・人間中心のアプローチ (non-anthropocentric approach) の射程、意義、課題について、脱・人間中心のアプローチの先駆けであり、かつそのなかで最も言及されるアクターネットワーク理論 (ANT) を軸に据えながら検討していくことにある。

3. 研究の方法

まずアクターネットワーク理論 (ANT) 関連の基本文献およびその周辺の議論に関する資料の収集・検討をおこなった。ANT 関連の文献に関しては、成立・展開期から現在に至るものを収集した。また、ANT 周辺の領域の資料についても収集した。ANT の出発点となったサイエンス・スタディーズ内外の、ANT と直接的に関係する議論に関する資料はもちろんのこと、人間以外の諸要素に着目する他の諸議論に関する資料も広く収集した。

収集した資料の検討は主として以下の3つの観点からおこなった。すなわち、ANT の成立期・展開期において、ANT の主唱者たちがいかなる議論を展開していたのか、ANT とサイエンス・スタディーズ内の他の立場との関係はいかなるものであったのか、そして ANT とその他の脱・人間中心のアプローチを採用する諸議論との相互関係はどのようなものか、である。これらの検討を通して、ANT 内の議論の展開と、ANT をめぐる様々な立場の相互関係を把握することを目指した。なお、の作業に関しては、研究を進めていくなかで、とくにエコロジーの分野について集中的におこなう方針をとることとした。

4. 研究成果

以下では、本研究で得られた研究成果について時系列的に記述する。

(1) 2019 年度の研究成果

初年度である 2019 年度には、資料収集をおこないつつ、同時並行的に資料の検討も開始した。そうするにあたっては、まずは「3. 研究の方法」の項目に記載した 3 つの観点のうち、とくに「ANT の主唱者たちがいかなる議論を展開していたのか」と「ANT とサイエンス・スタディーズ内の他の立場との関係はいかなるものであったのか」という観点からの検討を集中的におこなった。また、これらの検討をおこなうための準備作業として、ANT が成立した時代背景について把握・整理する作業もおこなった。

以上の作業の結果、まず 20 世紀後半以降、人文社会科学の分野では、われわれが生きる「社会」について論じるうえで人間以外の要素に意識的に着目するような議論が、とくに科学技術およびエコロジーというトピックのもとで現れはじめていたこと、そしてそうした時代背景こそが、ANT が成立し、今日みられるような影響力を獲得するに至るための素地となったことなどについて確認・整理することができた。

また、この作業により、ANT が成立したサイエンス・スタディーズと呼ばれる分野が、当時のアカデミックな世界のなかでどのような位置にあったのかについても明確に把握することができた。そしてそのうえで、ANT が成立・展開していくなかで、どのような議論が提起されてきたのか、ANT とその他のサイエンス・スタディーズの諸議論との関係はどのようなものであったかなどの諸点について整理し、見取り図を描くことができた。その際には、ANT 論者たちの議論の系譜を把握するだけでなく、ANT に対して批判的な議論にも「完全否定型」と「修正・提案型」の議論が存在すること、そして ANT の現在に至るまでの歩みはこうした批判的な議論との相互作用のなかで進んできたことについても明示することもできた。さらに、以上の作業のなかで、ANT 的な脱・人間中心的なアプローチが、個別のテーマ（エコロジーなど）に対してどのような貢献をしようかに関しても明らかにした。

これらの成果については、『アクターネットワーク理論入門（仮）』（ナカニシヤ出版）に寄せる諸論考としてまとめた（また、以上の検討から得られた知見は、後述する博士論文のなかにも反映されている）。なお本書籍は、発行することは決定しているものの、新型コロナウイルス感染症の影響もあり刊行作業が遅れている（現段階では 2021 年秋～冬の予定）。

ところで本研究は、脱・人間中心的アプローチの意義を明確にしておきただけ称揚することを目指すのではなく、当アプローチを今後さらに展開させていくうえで取り組んでいくべき課題を明確にすることも目的として掲げていた。そのため、本研究にとっては、脱・人間中心的アプローチに対する批判的な見解を正面から取り上げる作業はとりわけ重要なものとなる。このことを踏まえ、本研究では、上述したような作業にとどまらず、ANT を代表する B. ラトゥールの議論と、脱・人間中心的なアプローチを批判し、あくまでも人間の「知」に焦点を合わせた研究をおこなっている H. コリンズの議論との比較検討作業もおこなった。

この比較検討作業の成果は「異種混成的な世界における知のポリティクスを考える：H. コリンズの専門知論と B. ラトゥールのアクターネットワーク理論の比較検討を通して」（早稲田大学 博士論文）のなかにも反映されている（本稿の完成・受理自体は 2020 年度で、研究代表者は 2020 年 11 月に博士の学位を授与された）。そして本稿では、脱・人間中心的アプローチのさらなる展開のための課題の 1 つとして、「脱・人間中心的な観点を踏まえたうえで人間の知について改めて考えるか」という課題があることを明確化することができた。この課題は今後の研究における中心テーマの 1 つとする予定である（今後の課題 A）。

(2) 2020 年度の研究成果

本研究の最終年度にあたる 2020 年度には、の「ANT とその他の脱・人間中心的アプローチを採用する諸議論との相互関係はどのようなものか」という観点からの検討を集中的におこなった。なお当初はかなり広範な領域の脱・人間中心的アプローチを視野に入れていく予定であったが、2019 年度におこなった資料収集および検討の過程において、焦点を 1 つの領域に絞った方がより有益な成果が期待できるとの結論に至った。というのも、いずれの領域においても当初の想定以上に多様な脱・人間中心的アプローチが乱立している状況にあり、これらを限られた期間のなかで網羅的に扱おうとすることは、得られる知見の質の低下につながる可能性があると考えたからである。そのため、より広範な領域の脱・人間中心的アプローチの整理・検討は今後の課題とし、今回は、2019 年度時点での検討結果も踏まえ、昨今関心が高まっており、さらに ANT 内でも活発に議論されているエコロジーの領域に焦点を合わせて検討をおこなった。

その結果、とくに人文地理学系の論者などが中心となって牽引してきたポリティカル・エコロジーの潮流や、国内の環境社会学、さらに一部の自然科学的なエコロジー論などを含む他の脱・人間中心的観点をもつ諸議論と ANT の観点との比較検討などをおこなうことができた。またそ

の過程において、ANT 的な脱・人間中心のアプローチが、昨今ますます重要なテーマとして言及されるようになってきている「レジリエンス」について論じるうえで非常に重要な貢献を果たしうることも論じることができた。ここで提起された「ANT 的な観点からレジリエンス概念について考える」という課題もまた、今後の研究テーマとして引き続き検討していく予定である（今後の課題 B）。

これらの検討の具体的な成果としては、学会報告 2 件と学会誌への寄稿・投稿 2 件をおこなった。まず学会報告としては、日本社会学会第 93 回大会：テーマセッション「アクターネットワーク理論（ANT）の可能性とその応用」にて「アクターネットワーク理論とエコロジー：異種混成的な世界における『平和』構築について」を報告し、第 62 回環境社会学会大会では「アクターネットワーク理論の脱・人間中心のアプローチとエコロジー：環境社会学との連携の可能性」を報告した。また学会誌への寄稿・投稿としては、早稲田社会学会『社会学年誌』62 号へ論考「アクターネットワーク理論からレジリエンスを考える：エコロジーをめぐる脱・人間中心的ポリティクスに向けて」を寄稿し、また環境社会学会『環境社会学研究』第 27 号へ論考「人新世における脱・人間中心的なポリティクスに向けて：アクターネットワーク理論の環境社会学との連携の可能性に関する一考察」を投稿した（掲載決定済み、2021 年秋に刊行予定）。

以上のように、「公開」という面では、コロナ感染症の影響で一部に若干の遅れが生じているものの、概ね計画通りの成果を達成したと言える。また、「脱・人間中心的な観点を踏まえたいえで人間の知について改めて考える」という今後の課題 A と、「ANT 的な観点からレジリエンス概念について考える」という今後の課題 B を明確にできたことも本研究の成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 栗原 亘	4. 巻 -
2. 論文標題 異種混成的な世界における知のポリティクスを考える：H. コリンズの専門知論とB. ラトゥールのアクターネットワーク理論の比較検討を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学文学学術院2020年度博士論文	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 栗原 亘	4. 巻 62号
2. 論文標題 アクターネットワーク理論からレジリエンスを考える：エコロジーをめぐる脱・人間中心的ポリティクスに向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会学年誌	6. 最初と最後の頁 23～48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗原 亘	4. 巻 27
2. 論文標題 人新世における脱・人間中心的なポリティクスに向けて：アクターネットワーク理論の環境社会学との連携の可能性に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 栗原 亘
2. 発表標題 アクターネットワーク理論とエコロジー：異種混成的な世界における「平和」構築について
3. 学会等名 日本社会学会第93回大会：テーマセッション 「アクターネットワーク理論（ANT）の可能性とその応用」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 栗原 亘
2. 発表標題 アクターネットワーク理論の脱・人間中心のアプローチとエコロジー：環境社会学との連携の可能性
3. 学会等名 第62回環境社会学会大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 栗原 亘	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 「ANT成立の時代背景と人文社会科学における『人間以外』への関心の高まり」、栗原 亘 [編] 伊藤嘉高・森下翔・金信行・小川湧司 [著] 『アクターネットワーク理論入門(仮)』	

1. 著者名 栗原 亘	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 「ANT略史：その成立と展開および批判に関する見取り図」、栗原 亘 [編] 伊藤嘉高・森下翔・金信行・小川湧司 [著] 『アクターネットワーク理論入門(仮)』	

1. 著者名 栗原 亘	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 「ANTと政治/近代」、栗原 亘 [編] 伊藤嘉高・森下翔・金信行・小川湧司 [著] 『アクターネットワーク理論入門(仮)』	

1. 著者名 栗原 亘	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 「異種混成的な世界におけるエコロジー：海洋プラスチック汚染というモノ（thing）を記述する」、栗原亘 [編] 伊藤嘉高・森下翔・金信行・小川湧司 [著] 『アクターネットワーク理論入門（仮）』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------